

日蓮聖人門連だより

発行
日蓮聖人門下連合会
東京都大田区池上1-32-15
〒146 電話(03)751-7181

昭和61年4月28日

創刊号

創刊の辞

理事長

長瀬 貫公



日蓮聖人門下連合会創立二十五周年の大会が昨年十一月二十一日京都妙顕寺に於て開催されました。御生前門下活動に御功績のあつた先師を追悼し、過去の歩みを省み、今後の進むべき方向について虚心坦懐に語りあう機会をもちましたことはまことに意義深いこととありました。当日配布されました昭和三十四年〜六十年に至る「日蓮聖人門下連合会」の「み」は特に貴重な資料で、先師先賢各聖が肝胆を砕いて門下各派の大同団結の道をさぐり、真剣な討議の下、さまざまな活動と事業を展開してこられた足跡は、日蓮門下の歴史の中で強く記録されるべきであると存じます。私共はこの足跡を有り難く継承し、益々の発展を推進すべき責務があると痛感するものであります。さて門下連合会規約の目的には「本会は日蓮聖人の理想を実現するため、祖廟を中心として門下各派及び教団並びに地方門下連合会の連絡、協力、団結を強化することを目的とする」とあり、この目的にそつて(1)祖廟護持の組織強化、(2)教育事業の提携、(3)布教の連合強化、(4)懇談会、講演会等の開催、(5)各種出版物の刊行、(6)海外布教の提携及び交流、(7)対外的な各種の運動、(8)その他、等事業を行うことを規定いたしております。

創刊を祝う 「二十一世紀に向けて」



日蓮聖人門下連合会結成二十五周年を期し機関紙の刊行を見た事は真に慶賀に堪えません。思えば昭和三十五年門下連合会の発足より二十五年の星霜を経て、今日まで赫赫たる足跡を残して参りました。その間、小納昭和三十八年日蓮宗事務総長の職にあり、新規約に基づき初代理事長に選出され、微力ながら門下各派と相はかり、調整、協議に意を傾注して参りました。御門下各派の皆様の昼夜をわかれたぬ深甚なる御援助、御協力を得て、宗祖日蓮聖人第七百遠忌記念事業も昭和五十年より正當五十六年を以て、五十七年迄の八ヶ年に亘つて展開、実施を見たのであります。これひとえに日蓮聖人門下が心を一つに結集、祖恩に報謝し、共

に手を携えて事業遂行に向けて一致団結の浄業の賜ものと存するのであります。四半世紀を経て、今日に至り新たに大きく躍進し、来るべき二十一世紀にむけ時代即応の活動が希求されており、中でも次代を荷負う門下青年層の若き溢れる活力と奮闘に期待するものであり、また私共も報恩謝徳の誠を捧げ、知恩感謝の念を再度自覚し、以て真の門下として死身弘法に精進し、僧俗一体となり祖意を顕揚し、新世界、新世代に対応する活動を目指すべきであります。今日まで日蓮聖人門下連合会の活動に対し御協力をいただきました、寺壇一統、各委員の方々に深甚の感謝の意を申し述べると共に、会の益々の御発展を祈り、発刊の御祝いの言葉といたします。

「信頼と合議を大切に」



このたび、日蓮大聖人門下連合会(以下略して門連と云う)に於て機関紙を発行することになり、ここに創刊に当り慶賀を表するものであります。かつて大正から昭和にかけての御門下の活動は、宗門の歴史を飾るに誠に相応しいものでした。立正大師諡号の宣下、それに併なう祝賀会、勅額の拝戴、水魚会の創立等々私達の先賢諸聖は多くの事業を残されました。その後戦中の合同、そして終戦と同時に元の組織にかえり、又それ以上に分派してゆきました。それは、信仰と云うものは権力に支配されないと云うことを如実に実証して居り、宗祖を始め、各派先師上人が当時の権力に屈することなく如法弘通せられた歴史が物語っております。然るにこの門連が創立されてから二十五年と云う長い間続いたことは、権力に

上つた会であるからであります。その様な意味から考えてみる時、門連が行なつた多くの行事はみな立派に成功しております。遠いことはよく存じませぬが、近くは七百遠忌の記念事業の一つ一つをとってみても全ては立派に円成し、輝々と輝きました。これは企画、運営は勿論、その衝に當る人々の信念と誰にも強制されず、お互いの意見を出し合い、それを尊重してこそあの様な大きな事業が出来たものと関係者各位に深く敬意を表するものであります。これらもお互い共同して行なわなければならぬ仕事か沢山あると思ひます。それらを一つ一つ皆さんで共に研鑽し異体同心の祖訓を体し私達と門連の諸聖と一語にやがて訪されるであろう五十周年に向つて前進してゆきたいと思つてい

「誕生を祝福する」



昭和五十六年に高祖日蓮大聖人の七百遠忌を迎えるに当り、門下の各教団は、慶讃法要を盛大に慶修することとはもとよりのこと、大いに宗意を高揚するよう、早くから多彩な記念事業を計画し、努力した。その中には「オラトリオ日蓮」の公演と音盤の頒布「日蓮劇」の全国巡演「日蓮聖人展」の主要都市での開催等のことを組み込み、充分に成果を挙げ得たことを喜んだのである。また翌五十七年の春には「青年の船」が出て、参加者一同に生涯忘れ難く有意義な思い出を作らせたことは、企画として成功したといえる。以上列挙したことは、実は日蓮門下連合会の合議決定のうえになされたこととて、一部の人は除いては、大方が連合会を、教団の宗政担当者達のサロンの存在としが理解してはなかつただけに、これを契機として認識を新たにすることに

なつた。このたび、日蓮聖人門下連合会(以下略して門連と云う)に於て機関紙を発行することになり、ここに創刊に当り慶賀を表するものであります。かつて大正から昭和にかけての御門下の活動は、宗門の歴史を飾るに誠に相応しいものでした。立正大師諡号の宣下、それに併なう祝賀会、勅額の拝戴、水魚会の創立等々私達の先賢諸聖は多くの事業を残されました。その後戦中の合同、そして終戦と同時に元の組織にかえり、又それ以上に分派してゆきました。それは、信仰と云うものは権力に支配されないと云うことを如実に実証して居り、宗祖を始め、各派先師上人が当時の権力に屈することなく如法弘通せられた歴史が物語っております。然るにこの門連が創立されてから二十五年と云う長い間続いたことは、権力に上つた会であるからであります。その様な意味から考えてみる時、門連が行なつた多くの行事はみな立派に成功しております。遠いことはよく存じませぬが、近くは七百遠忌の記念事業の一つ一つをとってみても全ては立派に円成し、輝々と輝きました。これは企画、運営は勿論、その衝に當る人々の信念と誰にも強制されず、お互いの意見を出し合い、それを尊重してこそあの様な大きな事業が出来たものと関係者各位に深く敬意を表するものであります。これらもお互い共同して行なわなければならぬ仕事か沢山あると思ひます。それらを一つ一つ皆さんで共に研鑽し異体同心の祖訓を体し私達と門連の諸聖と一語にやがて訪されるであろう五十周年に向つて前進してゆきたいと思つてい

「キラリと光る内容に」



日蓮聖人門下連合会が結成されて二十五周年を迎え、それを契機に今年より年二回、門連機関紙が刊行されると伺いました。これまでは、役員会に役員が出席して、情報の交換を行つてきた様ですが、機関紙となればより多くの人々の目にふれることとなり、その理解度は深まることと思われま

一方、現代は情報の氾濫時代といわれていて、錯綜する情報の整理が必要とされるこの頃です。こういう風潮の中で新情報は、関心をもち見ればどんな情報にも、それなりの意義があつて、活用され得るのようですが、ウツカリすると見落しやすいものも多くあります。ですからハマトンは「知的生活」の中で、私たちの知能に二種類あつて、インテリジェンスとインテレクタがある。インテリジェンスはいろいろな情報データから一つの結論を出したり、問題処理する能力を云うとすると、インテレクタはその時点では誰も正解を知らない、五年、十年と経つてみると、それが正解かがわかる。そういう問題が直感的にわかる能力

「墓をばみのぶ沢にせさせ候べく候」



門下連合会結成二十五周年を心からお慶び申しあげます。一口に二十五年といふが、この間、会の運営に携はられ、会として今日不動の態勢にまで育てあげられた関係各聖のご苦心に對しては心からなる敬意を表したい。

真骨問題と祖廟輪番奉仕に関する件であらう。申すまでもなく身延西谷の沢辺に聖骨を埋め墓を建てまいとせよ、といづくに死に候と墓をばみのぶ沢にせさせ候べく候(波水井殿御願)の祖意に基くものである。普通なら当然御遷化の地池上本門寺に御願所をご造営したであらうに、わざわざ不便な身延まで聖骨をお運びしてのお墓づくりは御遺言の忠実な具現にはかならなかつた。祖師の聖骨の鎮まる祖廟は「みのぶ沢」でなければならぬのであつて、さもなくば祖意に悖る。だが今やその聖骨は、その「みのぶ沢」の祖廟から他へ遷された。カラッポの祖廟への参詣の足は、自ら遠ざかるの音が大きく、心ある人びとの眉をひそめさせている。一日も早く聖骨を祖廟に奉還して祖廟本来の姿にたちかえらるやうにとの声は久しい。今回も七百遠忌という紀年にふさわしい行事として京都日蓮聖人門下連合会も身延山当局に要

請したし、又わが門連としても国柱会田中香浦会長の「御真骨奉還をめぐる提言」の如き極めて具体的高邁な配慮の提言も打ち出されたのであったが、ついにこの七百遠忌の紀年にその実を結ぶことのできなかったことは、甚だ残念というほかはない。

門下連合会の規約第三条の目的の項にも「祖廟を中心として」とうたっている

「未解決の問題をどうするか」

本門法華宗管長 永井 日揮



人生八十年度の時代を迎えたお蔭で、一生の間に宗祖日蓮大聖人の御遠忌に、二度（六百五十遠忌と七百遠忌）も遭遇し得た事は、私にとって限りなき感激であり得ます。殊に七百遠忌の御日には、自ら警を打って大法会を厳修し得た事は、終生忘れざる事のない法悦でありました。この大行事が門連結成二十五周年の期間中に於て執行された事も、又特筆大書すべき慶事であったと思ひます。門連の全機関をあげて、宗風の刷新と、弘宣流布の実を挙げ得た事は、洵に秀逸な快挙であつたと痛感しています。

所が平素余り門連と深いか、わりをもつていない私にとって、何となく物足りない感じがするのは、二十五年という年月は成程長いと云えば長いかも知れないが、其の長い期間中に於て、右の御遠忌事業を除いて、一体どんな業績を残して来たのか、という点について、判然と示して欲しいと思つてあります。只単に親交を深めるため、という程度の寄合として結成されたのか、それとも何等かの発展的な事業を企画して出来上つた機関なのか、その辺の主旨がわかりかねる次第であります。

若し結成当時、その主旨がはっきり挙げられていたのなら、今までにどれだけ業績を上げて来たのか知り度いものであります。またこれからは何をやらうとしていくのか、門連として是非やらねばならぬ、未解決の問題（祖廟関係問題、

ように、門下各派が文句なしに帰一できる場所は「祖廟」の他にはないのである。門下全体が祖廟に拝跪して心から願うように一日も早く聖骨の祖廟への奉還が望まれている。ここに門連二十五周年の多大の功を慶ぶと共に、当面するこの祖廟への聖骨奉還を重要課題として、門連の総力を挙げて邁進されることをねがうものである。

のほか、大正大学・大阪大学・竜谷大学・東京国立文化財研究所の各先生であつた。この、史上初めての法華経を中心とする国際会議が、結果的には日蓮談議を中心とする会議となつたとか、詳細は、元立正大学教授、日蓮宗ハワイ開教総長として活躍の村野忠徳と国柱会々長田中香浦氏が、国際会議の所感を述べられている。（「真世界」一九八五年二月号）

このことであり、機を知ることは、謗法の者に対して一向に「法華経」を説くこととあり、時を知ることは、実大乘の「法華経」でなければ末法の衆生は成仏しないことを、よく考えることであり、国を知ることは、法華一乗の国は日本国で、日本国は一向に法華経の国と知ることであると断ぜられている。

「門連加盟の経緯と展望」

京都日蓮聖人門下連合会理事長 吉永 正晴

門連機関紙の発刊をお祝い申し上げます。異体同心の聖旨に込め奉る門連の隆昌に大きな力となることと期待致します。

門連機関紙の発刊を祝う。門連加盟の経緯と展望。門連加盟の経緯と展望。門連加盟の経緯と展望。

「お題目総弘通運動」の一翼に

法華宗真門流管長 林 日圓



日蓮聖人門下連合会結成二十五周年を期し、門連の機関紙が誕生したことは、妙法広布に拍車をかけるものと、寔にご同慶にたえない。

哲学・文学・美術・政治・慣習制度に、どのような影響を与えたかについての学術会議に参加、研究発表をされたのは、総数二十四名で、そのうち日蓮関係が一〇名、天台関係七名、文学美術関係四名で日本から参加したのは、立正大学の渡辺宝陽・田村芳朗・糸久宝賢・関野堯海・桐谷征一先生と、国柱会々長田中香浦氏

のほかに、大正大学・大阪大学・竜谷大学・東京国立文化財研究所の各先生であつた。この、史上初めての法華経を中心とする国際会議が、結果的には日蓮談議を中心とする会議となつたとか、詳細は、元立正大学教授、日蓮宗ハワイ開教総長として活躍の村野忠徳と国柱会々長田中香浦氏が、国際会議の所感を述べられている。（「真世界」一九八五年二月号）

世の中を迷惑させているのが現状である。驚異的な科学の進歩発達、先端技術駆使して、ロボットによる産業革命時代・情報革命時代ともいわれられているが、要は科学も先端技術も、それを駆使する人間の、心の問題である。

門連加盟の経緯と展望。門連加盟の経緯と展望。門連加盟の経緯と展望。

門連加盟の経緯と展望。門連加盟の経緯と展望。門連加盟の経緯と展望。

祖廟輪番奉仕の実践

編集部

「祖廟輪番奉仕」は日蓮聖人滅後遺弟により制定されたもの。六老僧はじめ中老僧がたにより一カ月間、聖人の御廟所にお仕えし報恩の誠を捧げた。しかし、その輪番の制はくずれ、布教の全国的展開が開始され、分派を見るに至つた。この分派・分派の発生は一面では教義の深化であり、聖人教団の発展であつた。ところが不幸なことに、分派は分裂につながり、相互の対立をきたす歴史を経験しなければならなかつた。近代に入り、再び聖人門下の統合を図ろうとする動きが活発となり本会の設立にもつながつてきた。

こうした流れの下で、門下が連合する基点は、やはり「祖廟」であり、聖人入滅の直後の状態、すなわち輪番の制にかえることが、次にくる転点と思はれる。

去る昭和四十年、日蓮宗ならびに身延山は、御門下各教団のかねてからの願望をいれて、祖廟輪番給仕を連合会所属各教団の自由な奉仕に門をひらくべく、その宗制を改めずして各派による祖廟輪番の門をひらくに至つた。

本会の規約にも祖廟中心の精神は強くうたわれており、この祖廟輪番奉仕を毎年つづけている国柱会にスポットをあて、その方法や内容を紹介してみたい。

（昭和五十八年度実施例）

合掌 第十九回の祖廟輪番奉仕を奉行するにあたり、貴台には諸事をなげうって卒先参加の段心よりおよろこび申上げます。

ご承知のとおり本会の祖廟輪番奉仕は、全日蓮聖人門下を代表して給仕第一の聖訓をそのままに実践する如法のお給仕でありますので、期間中は整齊たる秩序のもとに万全を期し、各位のご協力を要請いたします。

身延山は朝夕冷気を感じる折、ご健勝にてご参加下さるよう折念いたします。

国柱会本部

- 常勤服 奉仕員は、自分の当番（係より予め割当）がきたら身心を整え輪番本部（林蔵坊内、国柱会）に出仕を告げ、常勤体制に入る。別紙の行軌に基づいて常勤、終つたものは宿舎に帰り、輪番本部へ常勤終了を報告する。
- 常勤服 奉仕員は、自分の当番（係より予め割当）がきたら身心を整え輪番本部（林蔵坊内、国柱会）に出仕を告げ、常勤体制に入る。別紙の行軌に基づいて常勤、終つたものは宿舎に帰り、輪番本部へ常勤終了を報告する。
- 常勤服 奉仕員は、自分の当番（係より予め割当）がきたら身心を整え輪番本部（林蔵坊内、国柱会）に出仕を告げ、常勤体制に入る。別紙の行軌に基づいて常勤、終つたものは宿舎に帰り、輪番本部へ常勤終了を報告する。

- 常勤服 奉仕員は、自分の当番（係より予め割当）がきたら身心を整え輪番本部（林蔵坊内、国柱会）に出仕を告げ、常勤体制に入る。別紙の行軌に基づいて常勤、終つたものは宿舎に帰り、輪番本部へ常勤終了を報告する。
- 常勤服 奉仕員は、自分の当番（係より予め割当）がきたら身心を整え輪番本部（林蔵坊内、国柱会）に出仕を告げ、常勤体制に入る。別紙の行軌に基づいて常勤、終つたものは宿舎に帰り、輪番本部へ常勤終了を報告する。
- 常勤服 奉仕員は、自分の当番（係より予め割当）がきたら身心を整え輪番本部（林蔵坊内、国柱会）に出仕を告げ、常勤体制に入る。別紙の行軌に基づいて常勤、終つたものは宿舎に帰り、輪番本部へ常勤終了を報告する。

- 常勤服 奉仕員は、自分の当番（係より予め割当）がきたら身心を整え輪番本部（林蔵坊内、国柱会）に出仕を告げ、常勤体制に入る。別紙の行軌に基づいて常勤、終つたものは宿舎に帰り、輪番本部へ常勤終了を報告する。
- 常勤服 奉仕員は、自分の当番（係より予め割当）がきたら身心を整え輪番本部（林蔵坊内、国柱会）に出仕を告げ、常勤体制に入る。別紙の行軌に基づいて常勤、終つたものは宿舎に帰り、輪番本部へ常勤終了を報告する。
- 常勤服 奉仕員は、自分の当番（係より予め割当）がきたら身心を整え輪番本部（林蔵坊内、国柱会）に出仕を告げ、常勤体制に入る。別紙の行軌に基づいて常勤、終つたものは宿舎に帰り、輪番本部へ常勤終了を報告する。

- 常勤服 奉仕員は、自分の当番（係より予め割当）がきたら身心を整え輪番本部（林蔵坊内、国柱会）に出仕を告げ、常勤体制に入る。別紙の行軌に基づいて常勤、終つたものは宿舎に帰り、輪番本部へ常勤終了を報告する。
- 常勤服 奉仕員は、自分の当番（係より予め割当）がきたら身心を整え輪番本部（林蔵坊内、国柱会）に出仕を告げ、常勤体制に入る。別紙の行軌に基づいて常勤、終つたものは宿舎に帰り、輪番本部へ常勤終了を報告する。
- 常勤服 奉仕員は、自分の当番（係より予め割当）がきたら身心を整え輪番本部（林蔵坊内、国柱会）に出仕を告げ、常勤体制に入る。別紙の行軌に基づいて常勤、終つたものは宿舎に帰り、輪番本部へ常勤終了を報告する。

- 常勤服 奉仕員は、自分の当番（係より予め割当）がきたら身心を整え輪番本部（林蔵坊内、国柱会）に出仕を告げ、常勤体制に入る。別紙の行軌に基づいて常勤、終つたものは宿舎に帰り、輪番本部へ常勤終了を報告する。
- 常勤服 奉仕員は、自分の当番（係より予め割当）がきたら身心を整え輪番本部（林蔵坊内、国柱会）に出仕を告げ、常勤体制に入る。別紙の行軌に基づいて常勤、終つたものは宿舎に帰り、輪番本部へ常勤終了を報告する。
- 常勤服 奉仕員は、自分の当番（係より予め割当）がきたら身心を整え輪番本部（林蔵坊内、国柱会）に出仕を告げ、常勤体制に入る。別紙の行軌に基づいて常勤、終つたものは宿舎に帰り、輪番本部へ常勤終了を報告する。

- 常勤服 奉仕員は、自分の当番（係より予め割当）がきたら身心を整え輪番本部（林蔵坊内、国柱会）に出仕を告げ、常勤体制に入る。別紙の行軌に基づいて常勤、終つたものは宿舎に帰り、輪番本部へ常勤終了を報告する。
- 常勤服 奉仕員は、自分の当番（係より予め割当）がきたら身心を整え輪番本部（林蔵坊内、国柱会）に出仕を告げ、常勤体制に入る。別紙の行軌に基づいて常勤、終つたものは宿舎に帰り、輪番本部へ常勤終了を報告する。
- 常勤服 奉仕員は、自分の当番（係より予め割当）がきたら身心を整え輪番本部（林蔵坊内、国柱会）に出仕を告げ、常勤体制に入る。別紙の行軌に基づいて常勤、終つたものは宿舎に帰り、輪番本部へ常勤終了を報告する。



要項

● 集合日時 十月二十一日 午前十一時三十分

● 集合場所 身延山西谷「林蔵坊」

● 常勤原則 十月二十一日十四時、開式

日蓮聖人門下連合会の回顧と展望



本稿は昭和六十年十一月二十一日、京都妙顕寺で開催された日蓮聖人門下連合会創立二十五周年の記念集會において、筆者が行なつた記念講話の要旨である。

国柱会会長 田中 香浦

日蓮聖人門下連合会創立二十五周年を記念するこの意義が深い集會において、お話を申し上げる機会を得ましたことは、省みてまことに感慨がたしかに覚えま

すと同時に、甚だ光榮に存する次第であります。

「立正安国論」七百年に

昭和三十四年と申せば、祖国は独立して日なお浅く、敗戦ショックは深刻で、日本人の精神的迷途は甚だしく、巷にはあたかも病んだ体で狼狽するビールの

ごとく、迷信邪教が流行し、日蓮聖人ご門下として黙視し得ない状況でありました。折しも日蓮宗におかれても、宗風一新の要があり、一宗の興衰を担って当妙

べき天の時の訪れではあるまいかと考えたのであります。

その思いを抱き、私は昭和三十四年の二月四日、当山に山田日真上人をお訪ねしたのであります。現下はその趣

旨にふかく共鳴同感され、当面しては第一国連七百年の記念行事を各宗合同で開

催するということに意見が一致したのであります。ただし今は自身登壇の以前であり、またこの種の件は、日蓮宗からの音頭取りは古往今来あまりよい結果はな

り、ぜひ国柱会から門下諸宗団に親しく呼び掛けて欲しいとのことでした。そこで日を改めて西下し、顕本法華宗

一日というこの日は、不思議にも山田日真上人の祥月命日に相当しているという

ご門下統合に向けて

山田上人と申せば、上人こそ若き日からご門下の統合に心を致された大先輩でありました。話は明治三十四年に溯り

ます。当時、東洋哲学館（東洋大学）に在るの学生を中心に、橘香会という組織があり、山田上人のほか中川親秀、柴田

親会の際で、「日蓮聖人門下懇話会」の常設が決定、やがて、翌三十五年に今日「日蓮聖人門下連合会」の結成に至り、

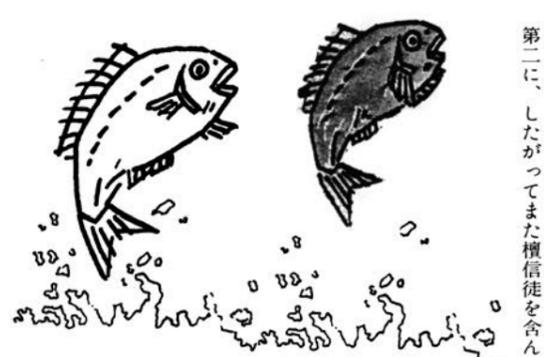
ご門下統合のさらなる画期的な事件は、明治三十五年の閉宗六百五十年記念大会

で、東京でついに十日間にわたって開催され、未曾有の盛況でありました。これはさきの脇田・本多両上人および田中智

だ運動体でないこと
第三に、それゆえに全ご門下を動員する

結成以来約二十年、私も理事の一人として、各師各聖と仲よく仕事をさせて戴

き、各師各聖と仲よく仕事をさせて戴きました。省みて本心に愉しく懐しい思



ご門下統合のさらなる画期的な事件は、明治三十五年の閉宗六百五十年記念大会

で、東京でついに十日間にわたって開催され、未曾有の盛況でありました。これはさきの脇田・本多両上人および田中智

学居士が中心に進められた。明治の門下連合の催しとしては、明治三十六・七年にかけ一カ年にわたる大阪

25周年記念

門連京都大会挙行

60・11・21 妙頭寺にて

結成二十五周年を迎えた日蓮聖人門下連合会では、昭和六十年十一月二十一日(木)午後一時より京都妙頭寺にて(門連京都理事会・懇談会)を開催、意義深い記念のついでが行われた。

当日は七十名余の参会者があり、まず午後一時より妙頭寺沖風亀首導師の下遷化先師追悼法要が厳修され、各派代表者が焼香。

終了後、沖貫首下挨拶、記念撮影をすませ、午後二時より国柱会田中香浦会長より記念講演が四十分に行われ、(三面参照)。

新理事長就任

午後三時過ぎ、理事会が開始され、まず木村光昭常任理事より提議があり、あたらしく長瀬貫公日蓮宗務総長を理事長に推薦したい旨発言あり承認された。

早速長瀬新理事長の就任挨拶があり、理事長長座のもとに議事進行。

議題に就いて、「京都門下連合会報告」「青年代表報告」「門下連合会今後の展望についての懇談」「その他」と進められた。

京都門下連合会の報告は、法華宗本門流本能寺赤田日崇貫首より行われた。また、それに関連して京都門連の風間随仁上人、大西寛美上人より補足説明がなされた。

今後の展望について提案

青年代表報告は、顕本法華宗朝倉俊幸上人より、第七百遠忌記念事業中の「日蓮聖人門下青年の船」を契機として、門下青年の結束を将来に向け強めていく旨の発表がなされた。また、望月身延山総務より青年の船講師団団長として挨拶があった。

ついて門下連合会今後の展望について懇談が行われた。

その中の主なものを列記すると、○長瀬理事長、門連檀信徒の横のつながりができないか。

○田中香浦相談役、門連各派寺庭婦人の団結について。

昨年ハワイで開催された法華経文化研究国際会議への参加。

○藤田京都門連理事長、日蓮聖人叡山遊学の地、横川定光院護持顕彰について協力援助の説明と依頼。

○望月一靖身延山久遠寺総務、門連が対外的に対応し得るボランティア組織を設置できないか。

○富田常任理事、祖廟中心体制を、より積極的に押し進める為に各門祖の墓を祖廟近くに設置できないか。

日蓮宗寺院名簿に門連各派宗務所の名簿を掲載してはどうか。

門下連合会結成二十五周年の声明文を採択発表してはどうか。

以上のような積極的な諸提案が行われ活発な討議もかわされたが、すべて常任理事会に附託される事となった。

追悼法要・先師各聖(順不同)

なお、当日の先師追悼法要での先師は左記の各聖である。

- 日蓮宗
本覚院山田日真上人、一乗院藤井日静上人、一妙院望月日雄上人、大玄院望月日滋上人、真乘院竹下日康上人、正心院小川日進上人、泰篤院日喜安藤順学上人、龍寛院日勝松村寿頭上人、唱静院日実黒沢行静上人、常照院日相鈴木常耀上人、圓隆院日仁福山恵敏上人、勸求院日閑明渡恵雄上人、妙覚院日等鶏内智賢上人、法華宗本門流
信昌院福島日陽上人、
顕本法華宗
永祥院吉永日洋上人、本慈院土屋日宏上人、法雨院朝倉日夫上人、三妙院島田日憲上人、
法華宗陣門流
明静心院村上日宣上人、
法華宗真門流
寛学院上田日丈上人、文有院竹内日進上人、智啓院日釋三崎智啓上人、良昌院水野日尊上人、
日蓮本宗
高見日連上人、
本門仏立宗
天真院梶本日風上人、信照院田中日晨上人、本国土院田中日廣上人、

国柱会
即三院智融日一星野武男居士、守国院謙信日規松浦克己居士、唱玄院宣道日伸木内伸之居士、
日本山妙法寺
行勝院藤井日達上人、
以上

盛り上げる懇親会

午後四時半懇親会を終了。会場を石長松菊園に移し懇親会が催され、和気藹々のもと、門連のさらなる発展と今後の協力が確認された。

宴たけなわとなったとき、門連相談役斎藤龍進師が立ちあがり緊急動議として「声明文」の案文を提出、全員の賛成を得て採択された。

午後八時散会。

なお、採択された声明文は以下である。

声明文

我が日蓮聖人門下連合会はここに結成満二十五周年を迎え、百尺竿頭更に一步を進め、僧俗一致以て異体同心の祖訓を体し、四海帰妙の祖願達成に一路邁進せんことを誓願するを聲明する。
昭和六十年十一月二十一日
日蓮聖人門下連合会京都大会



日蓮聖人門下連合会のあゆみ

昭和34年~昭和60年

Table with 2 columns: Year (年次) and Main Activities (主な動き). It details the history of the Nichiren Buddhist Association from 1959 to 1975, including the formation of the association, the election of a president, and various commemorative events and organizational changes.

年次	主な動き
昭和50年 7月9日	を深め700遠忌を期し大同団結を目指す。 於 学士会館 常任理事会 700遠忌記念事業の企画検討。聖人劇については前進に依頼する方向。オラトリオ日蓮聖人については作曲齋藤敏郎氏、作詞西川満氏の二氏が有力候補としてあがる。聖人展については新聞社との共催の方向が打ち出された。 於 久遠寺 身延山祖廟参詣理事会 門下連合会700遠忌記念共同事業としてオラトリオ日蓮聖人、聖人展、聖人劇を三本柱としていくことを決定した。 京都門連より御真骨奉遷実現の懇請書を身延山当局に手交した。 於 宗務院 常任理事会 松村寿顕日蓮宗務院総長、理事長に就任。 規約改正案審議。顧問、相談役を置く事を決定。 於 久遠寺 身延山祖廟参詣理事会 事業報告・決算報告・今年度予算承認。 門下共同事業、規約の改正など協議。 オラトリオ日蓮聖人については昭和52年1月4日に作詞が完成。 聖人劇については前進による興行を昭和54年6月から11月(第一部)、昭和56年後編を上演する事に決定。 聖人展については中井氏案を中心にA班・B班に別れて具体化を図る。 規約改正の件協議。 京都門連より久遠寺当局に手交された御真骨奉遷問題について、重ねてその実現方を当局に申し入れた。この問題をめぐり田中常任理事より御真骨奉遷をめぐる提言が後に参考として配付された。 於 有清寺 京都門連と懇談会 門下共同事業報告。 御真骨奉遷問題の取扱について協議。 (身延山当局に対する決議文を採択) 理事長、常任理事が久遠寺に於いて、京都門連にて採択された「御真骨奉遷に関する要望書」を望月法主に手交した。 於 久遠寺 身延山祖廟参詣理事会 昭和52年度門下連合事業報告、予算、決算承認。 共同事業中聖人劇については、昭和54年5月東京読売ホール興行を皮切りに自主興行4ヶ所、地方買取り巡回興行全国34ヶ所、70乃至80ステージの子定にて推進中。聖人展については昭和56年東京、大阪、九州の各主要都市百貨店で行うべく推進中。 (聖人劇 地方巡演 買取り興行6月より11月51ステージ 計82ステージ) 於 宗務院 常任理事会 共同事業推進の件協議 (仮称)日蓮聖人700遠忌報恩協議会結成の件協議 (新興教団への呼びかけ) 700遠忌共同事業に加えて 日蓮聖人門下青年の集い 洋上研修の件につき提案がなされた。 (田中常任理事提案) 於 妙蓮寺西陣会館 京都門連との懇談会

年次	主な動き
昭和54年 11月21日	共同事業の推進、特に三本柱の共同事業に加えて御門下青年の結集についての提案がなされ全員の賛同を得、企画の具体化については常任理事会に一任された。 於 要法寺 京都門連との懇談会 事業報告、共同事業、報恩協議会の件協議。 聖人劇については5月18日初演以来11月6日迄全国133ステージの興行を盛況裡に終了。 嵐主史より挨拶。 青年の船については、青年の船企画委員より正式企画書が提出され発表説明が行われた。 於 本禅寺 京都門連との懇談会 共同事業推進の件協議。 青年の船企画委員会提出の企画が常任理事会に於て実行が承認され企画委員会が実行委員会に衣更し実働に入った旨報告がなされた。 於 久遠寺 身延山祖廟参詣理事会 塩田義朗日蓮宗務院総長理事長就任 各派管長、会長、総長出席のもと700遠忌報恩法味言上の後理事会開催。 共同事業中、聖人展について古瀬聖徳常任理事、聖人劇については太田寛常任理事、オラトリオ日蓮聖人については大橋邦正常任理事、青年の船については木村光昭常任理事よりそれぞれ報告が行われた。 於 妙蓮寺 京都門連との懇談会
昭和55年 10月30日	日蓮聖人展 大阪 阪神百貨店 昭和56年4月9日〜4月21日 35000名動員 東京 上野松阪屋 昭和56年4月23日〜5月5日 45000名動員 九州 小倉井筒屋 昭和56年5月8日〜5月19日 20000名動員 計100000名動員
昭和56年 6月19日	日蓮聖人劇 東京 浅草公会堂 昭和56年9月2日〜9月10日 18ステージ 東京 読売ホール 昭和56年9月11日〜9月15日 10ステージ 大阪 朝日座 昭和56年6月28日〜7月5日 16ステージ 京都 南座 昭和56年7月22日〜7月28日 14ステージ 名古屋 中日劇場 昭和56年8月21日〜8月24日 8ステージ 地方巡業 昭和56年7月7日〜11月12日迄 合計66ステージ(以上都市公演) 31都市36ステージ 上記計 102ステージ
昭和56年 11月10日	オラトリオ日蓮聖人 昭和57年4月、新宿文化センターで行われる可能性について発表。 青年の船 本年5月15日コラルプリンセス号の船主である

年次	主な動き
昭和57年 3月26日 4月22日	スワイヤージンギン社と日蓮聖人門下連合会との間で、正式に契約書を取り交して実働に向け計画が進められている。 以上報告の他、オラトリオ日蓮聖人、青年の船の実行について討議。 青年の船実施、サイパン・グアム島 500名 於 新宿文化センター大ホール 観客1800名 オラトリオ日蓮聖人発表演奏会 於 久遠寺 身延山祖廟参詣理事会 青年の船実行委員参加 御前に共同事業円成報告並びに青年の船団長持田貫宣「青年の船宣言」朗読。 事業報告、四大事業円成に鑑み各担当理事より詳細報告。 青年の船記録集の製作承認、編集委員会構成の承認、門下青年の連帯について意見の交換があった。 予算・決算承認。 於 宗務院 常任理事会 遠藤日護日蓮宗務院総長理事長に就任。 祖廟参詣理事会の件協議。 青年の船記録映画、記録集完成祝賀会の件承認。 於 久遠寺 身延山祖廟参詣理事会 事業報告、予算、決算承認。 門下共同事業について協議。 青年の船祝賀会に30万円の補助決定。 御門下青年組織化の問題は重要課題で、今後積極的に討議を重ねる方向を打ち出すべく検討する事を申し合わせた。 於 久遠寺 身延山祖廟参詣理事会 門下連合会結成25周年に相当するので、それにふさわしい事業を行うべきだとの提案がなされた 於 久遠寺 身延山祖廟参詣理事会 事業報告、決算・予算承認。 門下結成25周年にあたり、来る京都門連を記念の大会とする。その為に事務局より各派へ先師各聖(御遷化を含む)の名簿及び各派門連のあゆみを御提出頂いて御参加を頂き、先師追悼法要を行い門連の今後について共に語り合う場を持つ事を決定した。尚、門連のあゆみについては常任理事会でまとめることとなった。 於 宗務院 常任理事会 長瀬貫公日蓮宗務院総長理事長に就任。 身延山祖廟参詣理事会に基づき門下結成25周年を記念する京都門連としての事を決定した。 会場は妙蓮寺とし、法要等については京都門連に一任を決定。
昭和58年 5月24日	昭和59年 6月6日
昭和60年 5月11日	昭和60年 6月25日
昭和60年 10月21日	以上は昭和三十四年より六十年に至る「あゆみ」の一部である。正式な記録集はいずれ諸資料もあわせて一冊として刊行の予定である。

るつうぶん



■二十五、長いようで短かく、短かくて長い区切りである。この区切りを期してようやく創刊された本紙であるが、ともかく世に送り出すことになった。ともかくなど、書くに不謹慎とおしかりをうけそうだが、七百年遠忌の記念事業を門連の総力を結集して成功に導いたあと、いわば虚脱状態を卒業して、機関紙の発行にまでこぎつけたわけで、ポスト七百年遠忌にむけて門下連合の明確なルールが敷かれたわけである。

■さて創刊号の内容だが、理事長の創刊の辞には明確に門連のこれからのありべき姿が明示されているようである。また、各派管長現下のご挨拶は、それぞれの立場で敬意が示されている。ユニークさがあふれている、連合体のよさとむかひが浮き彫りにされている。しかし本紙の使命はあはれは各派のおかれた現在の立場を確認し合うということも要求される気がするので、次号からの編集方針の一助にしたい。

■二十五周年の記念理事会の報道がどうしても重きをなした。記念講演の要旨、先亡追悼の各師、そして簡潔な声明文、昭和六十年十一月、京都はまっ赤に燃えたのである。この火を願くば、若人の手にひきつがれるよう青年組織の充実を図っていかねばならないであろう。

■本紙は、年二・三回発行の予定で出発する。報道がとうぶんの間主になるかもしれないが、いずれ理論的な面も充実させ、日蓮聖人門下各派教団になくてはならない紙面作りにはげみたいと念じている。(事務局)

各派・教団短信



【本門仏立宗】 同宗の昭和六十一年度の宗務方針が発表された。同宗宗務院総長谷川日序師による方針文は以下である。これから四年たつと開導百遠諱になります。このようなき宗務を担当させて頂くことになったわけですが、この責任の重且つ大なることを身に帯びると感じます。(略) まず宗務に對する姿勢ですが、(1)宗制の完全履行。(2)修行充実。正統徒増加運動は、これをうけつぎ更に強化して、(3)仏立開導日蓮聖人百遠諱報恩構想答申書に副つて、できるかぎりこれを政策化してゆく。(4)一年以内に宗制解説書の決定、そして刊行。(5)弘通教線拡大を目標し、対社会的活動に一步ふみ出す。

【顕本法華宗】 同宗では、昭和六十五年が門流開祖日什上人の第六百遠忌に相当するので目下鋭意準備中である。その主な事業は、(一)顕本法華宗年鑑の刊行。(二)日什上人の御靈廟を総本山妙満寺に建立(昭和五十九年建立済み)。(三)プラザに新寺建立、現地の信徒と共に推進中。(四)全国檀信徒の研修(総本山にて)である。

【日蓮宗】 同宗では去る昭和六十年九月一日付の管長教旨が出され、来る昭和七十七年の開宗七百五十年記念に向け、「お題目総弘通運動の展開」が示された。十八カ年計画は三期にわけられ、一期六カ年の長期計画がたてられた。第一期は趣旨徹底を目標に、(合掌で光をあなたを拝みます)の「スローガン」を掲げ、全宗あげてお題目弘通にとりくむ。